

次世代を担う子どもたちの「生きる力」を育むー環境理解教育ー

チーム名 どじょっこ ふなっこ

リーダー 木村 修 メンバー 白川博文 北川清子

私たちの幼少期の環境問題で思い浮かぶのは、公害問題といったローカルなテーマであったが、今日は世界的規模で多様な課題がある。これらは人間が今日まで自分たちが暮らし易いように自然を利用してきたことで環境に影響を及ぼしたことによる。その結果として人間の生活に負の影響を及ぼしている。このように自分の生きた歩みが自然環境に悪影響を及ぼすことと自然の中に身を置く自分たちの生き様や暮らし方の双方が繋がっていることの「理解」を私たちは環境理解とした。

最近では英語を早い段階で教えるように、学校や教育の役割を時代に合わせて変えていく時代だと思うので、環境というテーマも現代的課題と位置づける必要があるのではないかと。子どもたちが「教え」と「学び」を通して身近な知識・技能を習得して市民として責任ある思考と行動に結びつくこと、また、学習や探求・分析・行動などの能力を育み、適応することにより、今、そしてこれからの生活等を変革できる気持ちを育てることを環境教育と定義したうえで、グループ学習を進めるにあたって小学生の身近な事柄の環境理解教育に焦点を当てた。

次世代を担う子どもたちの「生きる力」として環境理解教育の可能性についてヒアリングを中心としたフィールドワークで探り、提案・提言を試みることにした。ヒアリングは、まず神戸市の学校教育現場の実態、環境学習・教育の推進主体である兵庫県・神戸市の行政の取り組みの実情、そのうえで行政の取り組み内容が小学校の教育現場に浸透し目的や目標が共有され有効に活用されているかどうかを探った。しかし、行政の推進策や小学校教育現場での実情のヒアリングでは、義務教育課程だけでは実践は難しく、学校外の主体との協力が不可欠と考え、中間組織や環境カウンセラーの協働の事例を調べた。

これらの調査で、私たちのテーマの視点から、考えたことは、①理念や言葉が先行したお題目に過ぎず浸透していないこと②環境問題は広範囲で多面的な問題を児童の学びの発達段階に合わせていくこと③縦割り行政の弊害である行政の仕事の重複と無駄の印象を受けたこと④学校と地域の協力や専門家をつなぐコーディネーターの必要性を感じたこと、である。

文部科学省の方針は環境教育のために特別な科目を設けることなく全ての教科等の教育活動の中で環境に関わる学習を取り入れることだが、必ずしも徹底していない。そこで、未来に向けて「学ぶ」と「教える」の視点から、4つを提言・提案する。一つは教職課程で「環境教育を学ぶ」の履修。次に、身近な消費生活やライフスタイルの変換につながる教育。そして「環境」の教科化に向けた授業時間枠の確保。更に、学校外の多様な主体との協働、である。

